

暗黒の欠片
vol.7

沼のほとり

奇怪伯爵

1.

ハンス・アーロンについての意見は、ほぼ否定的だった。
どうやら、村では嫌われた存在であつたらしい。
もっとも、ごく少数ではあるが、同情的な意見もあつた。

ハンスは一人暮らしの中年で、沼で獲れる魚を売って生活費を得ていた。
食糧に関しては、漁の収穫と、自宅裏の畑から取れる野菜、そして自然豊かなアルボラの森の幸という三本柱によって、自給自足を維持していたようだ。
ハンスの家を見れば理解できるが、とても裕福な家とはいえない。
どうにか生活できるギリギリの状態を維持していたと推測できるが、彼はそれに不満を持つてはいなかった。

いかなる理由か、ハンスは祖父の男手一つによって育てられた。
村で、その理由を知るものは、誰もいない。
もともと、ハンスの祖父も偏屈な男で、あまり村人との交流に積極的ではなかった。
ハンスもその性格を受けついだのか、孤独な生活を送るようになった。
とはいっても、子供の頃は違つた。
やはり、遊び相手が欲しかつたに違いない。
村の子供たちが遊ぶ姿を、遠目に見るハンスの姿がしばしば見受けられた。
それでも村の子たちは、彼を受け入れることはなかった。
それどころか、時にハンスは残酷な仕打ちを受けることもあつた。
そういうこともあつて、彼は次第に村人と距離を置くようになっていた。

祖父は、ハンスに一人で生きる術を教えた。
簡単なことだ。
祖父も、長い間を孤独に暮らしてきたのだから。
いつしか、ハンスも成長し、祖父と同じようになっていった。
だが本当に彼は、その生活に満足していたのだろうか？
祖父だって、かつては結婚し、家庭を持った。
家族というものを知っている。
だが、ハンスにとっては、祖父の存在しかない。
彼に父親の記憶が残っているのか？
母親の記憶が残っているのか？
それは、誰にも分らない。
彼には、自分の心情を打ち明ける友人などいなかったのだから。

ハンスの祖父は、自分の死期を知っていたようだった。

自分の死ぬ前までに、ハンスが一人で生きていけるようなお膳立てをあらかじめ準備していた。沼の魚を買ってくれる市場は、今やハンスの重要な収入源であるが、そこへの出入りは祖父の尽力によるものだ。

また、ハンスが自家栽培する野菜の種を供給するルートも、祖父が敷いてくれたものだった。ハンスは無口ではあったが、特に激しい感情を見せることもなく、極めて物静かな男だった。そのため、祖父の死後も暫くは平穏な生活が続いていた。

シンガー山脈からの季節風が届き、ほぼ夏の様相を帯びた6月。

ハンスは夜釣りの目的で沼のポイントを訪れた。

そこはピーターズンの小屋の前で、その時はすでに廃屋となっていた。

ハンスの小屋より更に森の奥に位置しているので、ピーターズンがどこかに失踪してしまった今となっては訪問者も皆無だったのだ。

その家の栈橋がキャット・フィッシュの絶好のポイントであることを、ハンスは偶然発見したのだった。

失踪者の小屋の前とは決まりが悪かったが、それもいつしか気にならなくなっていた。

釣りを始めようと荷物を下ろしたハンスだったが、風に運ばれた異臭に顔をしかめた。

それは強烈な腐敗臭で、どこか近くに魚の死骸でもあるのだろうと予測された。

せっかくの好ポイントであったが、どうにも臭いが我慢できない。

その日、ハンスはそこでの釣りを諦めざるを得なかった。

何気なく眺めた小屋に、いつもと違う気配が感じられた。

良く見れば、玄関のドアが少し開いている。

一体、誰が.....。

まさか、ピーターズンが戻ってきたのだろうか？

ハンスは、足音を立てぬよう、小屋に近づいた。

開いたドアの隙間から、中を窺う。

そこに、信じられないものが横たわっていた。

それは、玄関から入ったものの、すぐに力尽きたらしい。

ドアのすぐ傍で、仰向けに横たわっていた。

何とも、奇妙な生物である。

大きさは、森に住む猿と同程度。

頭部と寸詰まりの胴があり、両の腕と脚がついている。

腕の長さは猿に近く、人間より胴体や足との比率は長かった。

外見は、醜悪だ。

頭部は、爛れた剥き出しの肉塊に短い毛が生えている。

顔らしき部分は陥没し、原形を留めていないようだ。

気温の上昇も手伝って、その肉は腐乱し、大量の蠅がたかっていた。

床には血が大量に流れ、乾いた痕が見て取れた。

沼に棲息するアリゲーター仕業だろうか？

ハンスは、酷い悪臭に吐き気を催しながらも、強い好奇心に駆られた。

既に、辺りは日が暮れかけている。

部屋には闇が侵入し、床に横たわる死体を黒いベールで覆い始めていた。

ハンスは一度、小屋の外へと出た。

小屋の周囲を物色すると、目当てのものを見つけることができた。

鉄の部分は錆ていたが、大きめのスコップだ。

山の小屋には、必需品であった。

ハンスは小屋に戻り、死体をスコップで掬った。

崩れた組織が分離し、泥のようになる。

ハンスは、それを沼に投げ捨てた。

何回かの作業で、死体は床から姿を消した。

放っておいたら、いずれ誰かに発見されるかもしれない。

新種の動物ということになれば、外から大勢の人間がやってくるだろう。

そうなれば、自分の生活も脅かされるかもしれない。

何も変わらぬ方が良い。

ハンスは、そう考えたのだった。

ハンスの頭には、小屋で見つけた醜い生物の記憶がこびり付いていた。
あのような生物が存在するなんて。
まだ他にも同じ種類のものがあるのだろうか。
恐怖と共に、好奇心が湧いた。
祖父が死んでからというもの、ただ生きるための毎日。
話相手もなく、感情を共有することもない。
ハンスは、自分を森に棲む生物たちと同じだと考えていた。
それぞれが個の存在であり、他の存在は自分にとって有害か無害のどちらかに分類できる。
あの生物は、自分にとって有害である可能性が高い。
接しないことが、得策なのだ。
しかし、放っておいて突然遭遇したらどうなるか？
何か、手を打っておくべきだろうか？
恐怖と好奇心は、ハンスを駆り立てた。
寝ても覚めても、あの生物の存在が気になるようになっていった。

季節は秋に移りかけたが、日によって夏を思わせる日も多かった。
そのようなある日、ハンスの家を招かるざる客が訪れた。
ハンスは、その男の名をバーキンズと記憶していた。
村では一番裕福な家庭に育ち、大規模な農場を営んでいる一家の次男だった。
ハンスの古い記憶が甦る。
バーキンズは、幼い頃から苦手な存在だった。
彼は家の威を借りて、事あるごとにハンスを苛めの対象としていたのだ。
彼の学校時代は、いかにバーキンズの目に留まらぬようにするかに費やされていた。
当然のことながら、現在は交流が絶えており、二人が顔を合わせることはなかった。

バーキンズの吐く息は酒臭く、あからさまに酔っていることが窺えた。
なるべく穏やかに対応していたハンスだったが、バーキンズは一向に帰る素振りを見せない。
何か面白くないことがあったらしいが、ハンスにとってはどうでも良いことであった。
終いには、バーキンズの暴言がハンスの古い記憶を呼び覚ました。
ハンスは強引にバーキンズをドアの外へと押し出した。
山での生活は、ハンスに屈強な肉体をプレゼントしていた。
バーキンズも力の差に驚き、一度は退散したように思われた。
しばらくして、ハンスが外へ出てみると、信じられぬ光景がそこにあった。

バーキンは、家の裏手に廻り込んでいた。
そこに、ハンスの祖父の墓地がある。
手作りの簡易な墓標だったが、ハンスが立てたものだった。
祖父との思い出は、そこに保管されている。
それが、無残にも破壊されていた。
犯人が、バーキンであることは間違いない。
彼は、ハンスの一番大切な思い出を踏みにじたのだ。
バーキンが、ハンスの悪口を流しているのも知っていた。
しかし、ハンスはそれを耐えていた。
全ては、祖父に迷惑をかけないためだった。
その祖父も、今はいない。

ハンスの心の中で、何かが弾けた。
後を追えば、容易にバーキンの姿を捉える事ができた。
背後から力任せに突進すると、バーキンは簡単に倒れた。
馬乗りになって、力任せに拳を振りおろす。
見る間もなく、膨れ上がるバーキンの顔。
歯が折れ、唇が裂けた。
夥しく流れる血。
ハンスがようやく正気に返った時、事態は最悪を迎えていた。
バーキンの変わり果てた姿が、そこにあった。
山の生活で育てられた筋力が、災いしたのだった。
ハンスは、思った。
こんなに簡単に、人は死んでしまうものなのか、と。

日が傾き、いつもと変わらぬ夜が訪れる。
どこかで、狼の遠吠えが聞こえた。
ハンスは壊れた墓標を新しいものに直し、何事もなかったかのように取り繕った。
しかし、動揺は治まらない。
後悔の念が、次から次へと湧いてくる。
いずれ、バーキンの搜索が始まるだろう。
当然、搜索区域はここまで及ぶに違いない。
村人たちは、真先に自分を疑うかもしれない。
彼らは幼少の頃からバーキンの態度を知っている。
ハンスが恨みを持っていたのも、至極当然のことなのだ。

容疑者の最有力候補は、自分以外にあり得ない。

ハンスは、祖父の墓を眺めた。

山の生活。

今は一人となってしまったが、この生活が気に入っている、

自然と共に暮らす。

村人から最低限の距離を置いていたのにも関わらず、人の手によってそれが脅かされている。

自分が何をしたというのか？

なぜ、放っておいてくれないのか？

祖父が生きていれば、この疑問に答えを返してくれるだろうか？

夜が、訪れた。

鮮やかな月が、森を照らしている。

沼で啼く蛙の音が、幾層にも重なって聞こえた。

時折、激しい水音が鳴った。

大型の魚か、ひょっとしたらワニがいるのかもしれない。

ハンスは、好都合だと感じた。

肩に担いだ袋の重みが、かなりの負担に感じられた。

その袋の中に、バーキンスの死体が入っている。

ハンスは、あたりが暗くなるのを待って、死体を処分するつもりだった。

鰐が血の臭いを嗅ぎつけてくれば、思惑どおりに事が進む。

泥酔したバーキンスが、沼に転落。

鰐に襲われたとしても、何の違和感があろう。

それをハンスの仕業と推理する者はいない。

証拠も、目撃者もないのだから。

ハンスの目前に、ピーターズンの小屋が現れた。

主を失った小屋は、石のような沈黙を保っている。

ハンスは棧橋に移動し、袋からバーキンスの死体を取り出した。

そのまま、沼に投げ捨てる。

袋の底に溜まった血液も、そのまま沼に流した。

血臭が多いほうが、それだけ鰐が気づく可能性が高まる。

ハンスは、黙々と作業を続けた。

作業が済めば、長居は禁物だった。

下手をすれば、自分も鰐に襲われてしまうかもしれない。

野性を怖れるのだ。

祖父は、よくそのことを言っていた。

祖父にも、何か危機に陥った経験があったのだろうか？

ハンスに、ふとした疑問が湧いた。

踵を返し、小走りにその場を離れる。

月と共に、星が出ていた。

これで、憂いが消えた。

明日からまた、いつも通りの生活を送れば良い。

もう自分に干渉してくる人間もいないだろう。

長い人生の中で、たまたま今日は最悪な一日になっただけだ。

最悪が、そう何日も続くわけがない。

しかし、その思いも奇妙な音に掻き消された。

ハンスは、耳を澄ます。

聞き間違いだろうか？

沼から、何かかが聞こえたようだったが……。

妙な胸騒ぎを覚え、ハンスはピーターズンの小屋へと戻った。

そこで見た光景は……。

なんということであろう。

かつて、ピーターズンの小屋で目撃した奇妙な猿が、そこにいた。

しかも、単体ではない。

4匹か、5匹……。

いや、数える途中でまた数が増えているようだ。

しかし、ハンスにとってその数はあまり重要ではなくなった。

もっと驚愕する事実がそこにあったのだ。

猿の群れは、暴徒の饗宴のようだった。

悲鳴とも、歓喜ともつかない唸り声。

凄まじいエネルギーの発散。

周囲に漂う、獣のすえた臭い。

およそ美しい月の下には似つかわしくない地獄絵図。

無残に引きちぎられたバーキンズの肉塊。

それが彼らに提供された、恐ろしき晚餐のメニューとなっていた。

戦慄が、身体を突き抜けていく。

あそこで喰われているのが、自分だとしたら？

引き裂かれる自分の体を想像し、足が動かなくなった。

奴等の注意が自分に向いたら？

自分の呼吸が、奴等に聞こえるのではないか？

自分の震えが、奴等に伝わるのではないか？

次々に新たな恐怖が生まれ、放出されていく。

ハンスは地面に突っ伏し、ただただ時の流れるのを待った。

土の匂いが、濃くなった。

感覚が、戻ってきたようだ。

気がつけば、地獄の亡者どもの雄叫びは聞こえなくなっている。

ハンスの知っている、森の夜が戻っていた。

ハンスは服についた土を払い、注意深くあたりを眺めた。

あの化け物ども……。

記憶を辿ってから、かぶりを振った。

野性は、怖いものであると知れ。

祖父の言葉が、再び浮かんだ。

もしかすると……。

祖父は、あの化け物猿の存在を知っていたのではないだろうか？

森の生活が長かった祖父が、遭遇する機会は決してゼロではなかったはずだ。

ひょとしたら、ピーターズンの失踪も絡んでいるのではないのか？

いや、もしかすると……。

自分の両親も奴等に襲われたのではないだろうか？

早朝の空気は、澄んでいた。

夏の間は、沼の生臭さが澱み、それを運び去ることができず、不快感ばかりが残った。

それも、もう終わり。

冬の前の、今年最後の実りの期間がやってくる。

ハンスにとっても、一番の忙しい時期だった。

冬に備えての食糧の調達をしなければならない。

陽が上る前に起床し、船を出す。

仕込んで置いた仕掛けを引き揚げ、かかった魚を回収する。

祖父に教わった手順を忠実にこなし、獲れた魚を船に引き揚げる。

変化があるのは、一日に獲れる魚の量と天候だけだった。

その変化だけで、ハンスは満足だ。

もし、ハンスに友人がいたならば、彼はアドバイスをくれたかもしれない。

そのような生活で満足なのか？

もっと儲けられる仕事もあるぞ。

街に出るのもいい。

村の若者は、週末になれば皆遊びに行っているぞ。

何ととっても、ここは淋しすぎるではないか、と。

しかし、幸か不幸か、そのような友人はいない。

お蔭で、ハンスは祖父の教えを忠実に実行することができた。

以前は、漁をしている間、ハンスは殆ど無心だった。

祖父と共に仕事をする時は、祖父の言葉を聞き、漁の技法を学ぶ。

それ以外は、自然の状況だけに気を配り、淡々と仕事をこなす。

余計な考えなど、そこに入る余地はない。

ところが、今は憂いがとぐろを巻いて滞留する時がある。

未知の化け物の恐怖。

両親の死因。

バーキンスの殺害。

祖父がいたなら、このような事にはならなかつたらう。

祖父がいたからこそ、煩わしいことはなかつたのではないか。

憂いを孕むことは、祖父が引き受けてくれていたのではないか。

ハンス・アーロンは、答えの出ない疑念に毎日を奪われていった。

水面に、朝日が反射する。
ハンスは我に返り、周囲を見渡す。
舟上から見る豊かな森。
聞こえてくる鳥たちのさえずり。
いつもと変わらぬ風景が、そこに存在した。
変わったのは、自分の置かれた状況だけだった。

舟を岸に着けると、そこに保安官が待ち構えていた。
保安官はバーキンスが行方不明だと伝え、彼の姿を見なかったかと聞いた。
ハンスは、知らないとだけ答えた。
長く話せば、それだけボロが出てしまうことは分かっていた。
もとより、人と話すのは苦手だ。

保安官も、あまり期待はしていなかったらしい。
バーキンスを見かけたら連絡してくれと言い残し、去っていった。
保安官の訪問は、ハンスの神経を極度に擦り減らした。
たった一言の、馴れない嘘。
それが、こんなにも重苦しいものだとはい。

その後も、保安官は度々顔を見せるようになった。
調子は、どうだ？
変わったことはないか？
初め、ハンスはその来訪が気まぐれであると思っていた。
しかし、回を重ねるごとに、不安が残るようになった。
保安官は、今まで自分のことになど関心を持たなかったはずだ。
祖父が死んだ後だって、心配して訪問してきたことなどない。
それが、突然に関心を持つものか？
違うに決まっている。
保安官は、別の目的を持っているのだ。
そう、それはバーキンス殺害の犯人捜しだ。
保安官にとって、自分は有力な容疑者という位置づけになっているのかもしれない。

度重なる保安官の訪問によって、ハンスは苛立ちを覚えるようになった。
しかし、それをあからさまに表に出すことはできない。
保安官の誘導尋問によって、何かボロがでてしまうかもしれない。

その怖れが、日増しに募っていく。

いや、それだけが理由ではあるまい。

祖父と二人だけの暮らしに、何の問題もなかった。

誰も、訪ねてくることはなかった。

ハンスは、それを寂しいと思うことはなかった。

その時の環境に満足し、生活に満足していた。

漁の仕事を覚えてからは、少しだけ苦手なことが生じた。

祖父の代わりに、町の市場に行くことだ。

他人との接触。

挨拶を交わし、魚を売って、金を受け取る。

ただ、それだけのことが、ひどく煩わしく思えた。

当初、そのことを祖父に言うと、強い口調で叱責された。

それは、生きるために最低限必要なことだ。

祖父の、真っ赤になった顔が思い起こされる。

その教えは、ハンスの心にしっかりと刻まれた。

生きるために。

ハンスは、その後何度もその言葉を噛みしめた。

考え事が、多くなった。

いや、憂い事というべきか。

それが、余計な想像に発展してくる。

保安官が、バーキンズ殺害の証拠を手に入れたら？

自分は、刑務所に行くことになるだろう。

刑務所が、どういう場所かは知らない。

しかし、罪を犯した人間が罰を受けるところだと祖父に聞いたことがある。

そこで不自由な生活を送るのだ。

この森の家を離れることになる？

想像しただけで、怖ろしかった。

自分は、この場所でしか生きることができない。

今さら、他の環境になど適応できるはずがない。

祖父だって、まさか自分がここを離れるとは想像すらしなかつただろう。

そうだ、祖父の教えは、この場所だけに限って有効なのだ。

ここを離れることは、生きる術を失うこと。

何とかしなければならない。

自分が生きていくために、それは必要なのだ。

生きてゆくために.....。

その日は、朝から頭痛に悩まされていた。

漁を休み、ずっと床に伏せていた。

2時間ほど眠り、水を飲みに行き上がると、窓越しに保安官の姿が見えた。

ハンスはどうしようもない苛立ちを覚え、感情のコントロールが効かなくなっていた。

自ら家の外に飛び出し、保安官の前に躍り出た。

血相を変えたハンスの表情に、保安官は驚いたようだった。

何か、問題でもあったのか？

ハンスは、そう聞かれたように思う。

自分で何と答えたか、覚えていない。

その時の記憶は、その後いつまで経っても思い出せなかった。

気付いた時には、保安官が背を向けてしゃがんでいた。

その先には、乾いた血痕が広がっている。

異臭漂うその空間は、かつてハンスが謎の生物の死骸を発見したピーターズンの小屋だった。

意図した訳ではなかった。

気付いたら、そこに二人でいた。

これは、後のハンス・アーロンの言葉である。

彼の言葉を信じるならば、ハンスの記憶は自分の家からピーターズンの小屋までスッポリと抜け落ちている。

しかし、この言葉を信じる者は、いなかった。

おそらく彼は小屋で何かを発見したと称し、保安官をおびき出したのだろう。

保安官の後頭部は、骨に陥没の跡が見られた。

これが、ハンスの残忍さを証明するものになってしまった。

スコップを、渾身の力で振り落としたのだ。

そしてその行為は、何度も執拗に施されていた。

その後、ハンスは保安官の体を小屋の外に出し、沼の中に投げ入れた。

後始末は、沼の住人がやってくれる。

夜になれば、怪物たちがやってくる。

鰐だって、棲息している。

一晩経てば、沼は事件の痕跡を消してくれるだろう。

沼は、人の介入を受け入れない。

そうだ、自分も人ではない。

沼の一部なのだ。

沼が、自分を守ってくれるはずだ。

ハンスの大胆な発想を余所に、捜査は綿密になっていた。

保安官の失踪ともなれば、無理もない。

もともと、入念な計画に基づいた犯行ではなかった。

衝動的に起きた凶事の痕跡は、数々の証拠となって浮上した。

こうしてハンス・アーロンは、1985年の冬を迎える直前に逮捕された。

私はこの古くて奇妙な事件を自分なりに消化するにあたり、ハンス・アーロンが暮らしたアルボラの森を訪れていた。

2005年、山が冬の支度を整える時期である。

濁った沼のほとりには、ピーターズンの小屋と思しき建物が存在した。

20年の歳月は小屋をすっかり浸食し、過去の出来事を全て包み隠していた。

当時の資料によれば、沼の底から発見された人骨は十八体に上る。

この発見は、ハンス・アーロンの逮捕後の捜査に因るものだった。

事件は精神を病んだハンスが全て企てたことだと処理されたが、彼の自白はバーキンズと保安官の二名のみである。

怪物の存在を信じる者はいなかったし、その痕跡すら見つかっていない。

しかし、私の見解は異なる。

残り十六体の殺害犯人が、ピーターズンであった可能性もある。

または、ハンスの祖父であったかもしれない。

沼は、静かに横たわっている。

過去の事件を包み隠し、己の中に取り込んでしまっている。

真相が語られることはないだろう。

結局、ハンスは精神病院で二年の月日を過ごし、その生涯を終えた。

死因は、記録では心不全となっている。

歩き始めた私の背後で、大きな水音が聞こえた。

それが真相を求めた私への、沼の答えだったのかもしれない。

暗黒の欠片 vol.7

<http://p.booklog.jp/book/24604>

著者：奇怪伯爵

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kkaiki0710/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24604>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/24604>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ